謎解きはリボーンの後で・・・

時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
謎解きはリボーンの後で・・・

【Ｎコード】
Ｎ３７４２Ｙ

【作者名】
時雨

【あらすじ】
オリ主である高嶺　朱雀（たかみねすざく）は目を覚ますと一つの部屋にいた。
扉から出てきた執事、黒野から今までの事を説明され親の計らいによって並盛高校に行く羽目になる。
何かそこで？グローブやボンゴレリングに炎灯しちゃったり、原作とは一味違う技習得しちゃったり、んで何故か難事件に挑んじゃったり、様々な出来事が起こっちゃいます。
楽しんで見てください。

目を覚ますと・・・（前書き）

初の二次創作なのでどうなるか分かりませんがどうぞご覧ください！

目を覚ますと・・・

目を覚ますといつもの朝だった。
眩しい朝日が窓を突き抜け部屋に入ってくる。小鳥たちのさえずりが聞こえてくる。
いつも通りの朝だった。だが一つだけ違うところがある。

「・・・どこだここ？」
俺、高嶺　朱雀（たかみねすざく）はとある部屋のベッドにいた。
しかし、その部屋はただの部屋ではない。貴族様が暮らしてそうなあの無駄に広い部屋だ。

カチャ・・・。

すると、部屋の扉が開いた。

「あっ。お気づきになられましたか」

そこには黒のダークスーツ姿の男がいた。

「後気分はどうですか？」

「あの。一つ聞いても良いですか？」

「はい。何でしょう？」

「あんた誰？」

すると男は、

「おっと、申し遅れました。私(わたくし)ここで執事をやらせていただいております黒野という者です。以後お見知り置きを」

「執事？」

「はい。朱雀様の旦那様から雇われました」

「父さんから！」

俺は目を丸くしながら言った。

「は、はい。作用でございます。覚えてらっしゃいませんか？朱雀様。昨日の事を」

「昨日の事？」

よ～く思い返してみた。すると一つの答えにたどり着いた。

「あー。まさかかとは思うが昨日、突然意識を失ったのって・・・」

「はい。旦那様が朱雀様の首に一撃を入れて、気を失わせたためでございます」

「あぁ・・・。そう」

その時、俺は内心思った・・・。

『あんのクソ親父がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！』と、心の中で叫んだ。

そんな事を気にせず黒野は、

「ところで朱雀様。入学式の準備は整っておりますか？」

「入学式？」

「はい。明日は並盛高校の入学式でございます」

「え？俺そんなとこ受けてないけど」

「これも旦那様の計らいでございます」

あの野郎おおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！

と、俺は心の声を必死に抑えながら、

「い、いや。まだだけど」

「作用でございますか。それではご用意いたしましょう」

黒野は手に持っていたリモコンを操作した。すると、壁からそれはそれはなが～いクローゼットが出てきた。

「えーと・・・これは？」

「こちらの中から一セット、制服を選んでいただきます」

「選ぶって・・・これ何種類あるんだよ・・・１００はあるんじゃないか？」

「正確には１１２種類でございます」

「１１２！」

再び俺は目を丸くした。
「何でここまで作ったんだか・・・いっそ私服校の方が良かったんじゃねーか？」

「それは同感でございます」

「しゃーない。とっとと選んじまうか！」

とは言ったものの、普通に一時間もかかってしまった。やはりここまで多いと時間はかかるわな・・・。
結局、俺が選んだのは上は黒のブレザー、下は白と黒のチェックのズボンだ。

「とてもお似合いですよ」

「そりゃどーも」

「では、次はカバンなのですが」

「まだ選ぶのか？」

「はい。これの他にも、靴、部屋、運動着、ｅｔｃ…」

「あー分かった分かった。とにかくさっさと選んじまおう」

そして早速、バックを選び始めた。
バックは先ほどとは違い、三つに決められていたのですぐ決まった。
俺は手下げ型のカバンを選んだ。
その後も色々ことは進み、すべてが終わったのはもう夕方の頃だっ

た。

「やっと終わったー」

「お疲れさまです」

黒野はコーヒーを机の上に置いた。

「そういえば、ここから並盛高校は近いのか？」

「はい。歩いて１５分の所でございます」

「チャリで１０分といったところか・・・」

「自転車で行くおつもりですか？」

「当たり前だろそんな近いんならわざわざ車で行く必要無いだろう」

「いえ、そうゆう事ではなくて無いのでございます。自転車が」

「え！そうなのか・・・しょうがない。明日は歩きで行ってその後で買いに行くか」

そうしてかれこれ一時間が経ち、時刻は１０時半。

「もう１０時半か・・・そろそろ寝るか」

こうして俺は慌ただしい１日を終えた・・・。

目を覚ますと・・・（後書き）

いや～何か見る限りほとんどオリジナルになってしまいました。

なんか・・・ねぇ・・・（前書き）

第2話
いや～今回は前回よりも長くなってしまいました。頑張って読んでください。
あと少しグダグダです。

なんか・・・ねぇ・・・

朝、俺はいつも通り目が覚めた。

ふとベッドの横を見ると荷物の入ったスーツケースがあった。おそらく黒野が準備したものだろう。まったく、本当に準備の良い奴だ。必要な物は全部揃っている。

そう思いながら俺は昨日選んだ制服を身にまとい朝食を取り、出掛けようとした。その時、

「お待ちくださいませ朱雀様」

黒野が何かを持ってきた。

「どうした黒野？」

「これをお渡しするのを忘れておりました」

すると持っていた箱を開けた。そこには二つのリングと懐中時計があった。

「これは？」

「こちらは並盛高校から贈られてきたものでございます。なにも個人認識のようなものだとのことです」

ふーん。並盛高校って随分と変わってんだな。

「分かった。ありがとう」

俺はリングをチェーンに通し首にかけ、懐中時計はポケットに入れた。

「それじゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃいませ朱雀様」

～・～・～・～・～・～

今、俺は一年生の教室にいる。だが・・・これは・・・ねぇ・・・。

『後ろからクラス全員の視線を感じるんだが・・・』

分かりやすく言ってしまえば、Ｉ○の第１話でゆう一○的気分である。

ただ一つ違うとすれば、クラス全員が女子ではないことだ。ちゃんと男子もいる。

だが・・・その男子でさえも俺の事を凝視している。

怖いよ・・・怖いよパト○ッシュ・・・。

「えー、皆さんこんにちは。それでは、我が校の説明をいたします。本校は入学式でも説明したように、自警団を育成するために様々な分野に取り組んでおります。」

あぁ。そういえばそんな説明してたな。校長から。確か名前は沢田・・・綱吉だったかな。帰ったら黒野に聞いてみるか。こうしてまあ説明は終わったんだが・・・未だに視線を感じる。

すると一人の男子が近づいてきた。

「よっ！俺、山本　啓信（けいしん）て言うんだ。よろしくな！」

その男子は他とは違い、どこか抜けているいわば天然な奴である。

「あ、あぁ。よろしく」

俺は山本と握手をしたついでに、

「なぁ。何で俺みんなに見られてるんだ？」

「何でって、そりゃあお前が大空の守護者だからだよ」

「大空の守護者？」

「そっ。大空の守護者はこの七部属性の中でも数少ない人間にしかないからなあ。だからお前新入生の言葉言わされたんだよ。ちなみに俺は雨の守護者だ」

あぁ。そういえばあったな・・・あん時は驚いたよだっていきなり新入生の言葉の書かれた紙を渡されんだもん。

「なぁ。その七部属性には何があるんだ？」

「あぁ。大空の七部属性には嵐、雨、晴、雲、雷、霧、そして大空の七つがある」

「へー」

「そしてそれぞれを色で表すと、嵐はレッド、雨はブルー、晴はイエロー、雲はヴァイオレット、雷はグリーン、霧はインディゴと言うことになる。みんなのリングを見てみろ」

俺はクラスのみんなの指に目をやった。そこには、様々な色の付いたリングがはめられていた。
そこで気づいたのは、

「みんなほとんどデザインが違うんだな」

「まぁな。リングのデザインによってそいつがどこに所属するかがほとんど分かる」

そこで山本は、

「そうだ。朱雀のリングも見せてくれよ」

「え？あぁ。いいけど」
俺は首に下げていたリングを山本に手渡した。

「おっ！やっぱ朱雀もアニマルリング持ってんのか」

「アニマルリング？」

「あぁ。アニマルリングって言うのはそれに炎を灯せば実体化して一緒に戦ってくれるとても便利なやつだ。ちなみに朱雀のは・・・これは、鳥だな」

「ふーん。で、もう一つは？」

「あぁ。これは・・・」
すると山本の見る目が変わった。

「これは・・・ボンゴレリングだ・・・」

「ボンゴレ・・・リング？」

「あぁ。この学校の中では三つのＡランクオーバーのリングを持つファミリーがある。シモンファミリー、ミルフィオーレファミリー、そして、ボンゴレファミリー」

「そのうちのボンゴレファミリーのリングがこれって訳か・・・」

「あぁ。でもまぁ良かったよ。お前もボンゴレで」

「・・・え？」

俺は頭の中に？のマークが浮かんだ。

「まさかかとは思うが・・・山本、お前・・・」

「あぁ。俺もＡランクオーバーでボンゴレファミリーだ」

やっぱりか・・・。ん？てゆうことは・・・。

「なぁ。俺達の他にも後５人いるってことか？ボンゴレのＡランクオーバーが」

「まぁそうゆうことになるな」

いったい誰だ？

「まぁ一人はめぼしはついてるんだがな」

「え？誰？」

「俺の友人で嵐のＡランクオーバーがいるんだ」
「そっか・・・んじゃあ明日会ってみるか」
「あぁ。んじゃあ今日はこれで」
「おう。また明日」
そして今日は帰宅した。
～・～・～・～・～・～帰宅後、俺は黒野に校長先生について聞いてみた。
「なぁ。黒野」
「何でございましょう？」
「お前、うちの校長先生について何か知ってるか？」
「校長先生と言いますと？名前は？」
「確か沢田　綱吉だったかな」
すると黒野の手が止まった。
「ん？どうかしたか？」
「朱雀様、それは確かでございますか？」
「あ、あぁ。そのはずだけど・・・誰なんだ？」
「あの方はボンゴレＸ（デーチモ）。ボンゴレファミリー十代目でございます」

「え・・・ウソだろ・・・」
「もう帰っていらしたのか・・・」
「なぁ。何でお前校長先生の事知ってるんだ？」
「私は・・・」
その後、黒野の言ったことは、
「私はボンゴレ十代目の守護者だからでございます」
「なん・・・だって・・・」
「守護者といっても正確には少し違いますが・・・」
「どうゆうことだ？」
「私の属性は確かに大空の七部属性なのでしが、私は他の部隊に所属していました」
「他の部隊？」
「はい。私が所属しているのは・・・」
その後、俺は黒野の言ったことに耳を疑った。
「私が所属しているのは・・・ＣＥＤＥＦ（チェデフ）でございます」
「ＣＥＤＥＦってボンゴレとは独立した諜報組織でもあり門外顧問でもある組織だよな」

「作用でございます。良くご存じで」

「まぁ友人から少し聞いたんだ」

「もしや、山本様では？」

「良く知ってんな」

「はい。彼はボンゴレ十代目、雨の守護者山本　武様の息子にあたります」

マジかよ・・・。

その後、俺は黒野の話を聞いた。話によれば、残りの守護者はあの学園にいるらしいのだが、それが誰かとゆうまでは知らないとのことだ。

まぁその事に関してはいいや。明日からはちゃんと自転車で行けるから今日よりはゆっくりと行けるからぐっすり寝るとしよう。

こうして俺は眠りについた。

～・～・～・～・～その頃、学校では、

「集まり始めたな・・・」

「あぁ・・・」

「ボンゴレとシモンのような・・・」

校長室には二人の男がいた。

「オレ達の意志を継ぐ真の後継者が・・・」

その校長室には柔らかい月明かりが差し込んでいた・・・。

なんか・・・ねぇ・・・（後書き）

まさかの黒野がＣＥＤＥＦとゆうオチ・・・。

次回も頑張ります！

（ ∀-）

ルームメイトはお嬢様？（前書き）

第3話
やっとヒロインの登場です。

ルームメイトはお嬢様？

翌日、俺は自転車で学校に行き、山本にある人物を紹介された。そう。昨日言っていた嵐のAランクオーバーの友人である。だが・・・。

「こいつが俺の友人、佐久間　翔太（さくましょうた）だ」

「誰が友人だ、ダアホ！」

その佐久間　翔太とゆう人物は見る限り少し不良っぽい感じの人物なのだが、どうも不良のように見えない。

え？どうゆう意味だって？ん～・・・分かりやすく言えば、なんとゆうか見た目は怖いけど心は優しいってゆうあれだよ。ほらよくいるじゃん。見た目は不良だけど見かけによらず横断歩道でおばあちゃんを助けてたりしている人。あんな感じ。

「で、こいつが・・・」

「あぁ。大空のAランクーバーの高嶺　朱雀だ」

「ふーん・・・」

すると佐久間は俺の顔をまじまじと見た。

すると佐久間は、

「やっぱお前、綱吉さんに似てるわ」

「え？綱吉さんに？」

「あぁ」

佐久間はあっさりと答えた。

「どこが？」

「まぁ、なんとゆうかわかんねえけど、とにかく似てる」

「は、はあ・・・」

こうして新たな仲間が増えた。

～・～・～・～・～その日のＨＲ・・・。

寮の部屋割りが発表された。

「えーと、俺は０２７号室か・・・」

部屋割りの横に寮への地図があるのだが、迷う所ではなかった。なぜなら・・・。

『あそこって学生寮だったのか』

そう、そこは俺と黒野がいるあの屋敷だったのだ。

『なるほど。どうりで無駄に広いわけだ・・・』

その後、俺は迷う事なく寮（屋敷）に着いた。

入ったところに山本と翔太がいた。

「お前らも寮生活なのか？」

「あぁ。それで俺と翔太は同じ３１０号室になったんだ」」

「ふーん。俺とは少し遠いな」

「まぁ、学校でも会えるし暇なとき遊びに行くよ」

「あぁ。じゃあまたな」

山本達に別れを告げ、俺も自分の部屋に向かった。

～・～・～・～・～・～俺がちょうど部屋に着く手前で廊下の曲がり角から声が聞こえた。

「いいから、私の執事になりなさい！」

「それは出来ません！」

「どうしてよ！」

「私はこの寮の執事。あなた様だけの執事になる訳にはいきません」

「そんなのどうでもいいでしょ！いいから私の執事になりなさい！」

なるほど、黒野と誰かが言い争っているのか・・・

「おいおい、どうしたんだよ？二人で言い争って」

「あぁ。朱雀様。この方が・・・」

「私の執事になってくれないの！」

「で、この人は？」

「池沢　夏希様でございます。大企業、池沢グループの社長の一人

娘でございます」

へー。まぁ、服装からしていかにもお嬢様って感じはするけどな。

「だから私の執事になりなさい！」

「ですからそれは・・・」

「かしこまりました」

「え？」

「私（わたくし）があなたの執事となりましょう。お嬢様」

「朱雀様！」

「・・・あなたに出来るの？」

夏希が疑いの目で見てきた。

「ご安心ください。私、人のお世話は得意中の得意ですから」

「そ、そう。ならあなたに任せるわ。えーっと・・・」

「高嶺　朱雀ともうします。以後お見知りおきを」

こうして俺と夏希お嬢様の生活が始まった・・・。

ルームメイトはお嬢様？（後書き）

いや～。今回は朱雀が執事になるとゆうオチ・・・。
次回も頑張ります！

え～っと・・・どちら様で・・・・？（前書き）

第４話

今回はリボーンに出てくる“あの人”が登場します！

え～っと・・・どちら様で・・・？

翌朝、夏希は目が覚めるとそこにはエプロン姿の朱雀がいた。

「おはようございますお嬢様。昨日は良く眠れましたか？」

「えぇ。おかげさまで・・・。ところで朱雀」

「はい。何でしょう？」

「あなた何してるの？」

「見ての通り朝食を作っているのです」

朱雀は平然と言った。

「今ちょうど出来上がりました」

テーブルに出されたのはトースト、スクランブルエッグ、サラダ、コーヒーだった。

「そう、ではいただくわ」

そして、今日も1日が始まった・・・。

～・～・～・～・～俺は一足早く準備が出来たのでお嬢様を待つことにした。

「ごめんね待たせて」

「いえ、ではまいりましょう」

俺は自転車の後ろにお嬢様を乗せ、学校に向かった。その途中、

「ねえ朱雀、今日の朝食とてもおいしかったわ」

「お気に召していただいて良かったです」

「あなたどこでならったの？」

「フフフ・・・それは秘密ですよ」

「えー。教えてよ」

こんな感じで歩いていると目の前に一人の男が現れた。

「おい、お前ら！」

「いいから、教えてよ～」

「では、今度簡単なものを教えましょう」

「やった！」

二人はその男を素通りしていった。

「だから、ちょっと待てよ！」

男は少しキレ気味で二人を呼び止めた。

そして、俺は振り返り、

「何ですか？とゆうか・・・どちら様ですか？」

「俺は並盛高校２年剣道部主将、持田だ！」

そこまでは聞いてねーよと言いたい気持ちを抑え再び持田先輩の話を聞いた。

「高嶺　朱雀だったな。お前に決闘を申し込む！」

「は、はぁ」

「放課後、剣道場にこい！逃げるんじゃないぞ！」

と、言って持田先輩は去っていった。

はぁー。どうしよう。しゃあない、行くか・・・。

～・～・～・～・～放課後、俺は剣道場にいた。だが何か様子がおかしい・・・。なぜならそこには剣道部員だけではなく一般生徒もいるからだ。

「なぁ山本。持田先輩ってそんなに強いのか？」

「まあ去年、市大会で優勝したくらいだからな。」

「ふーん・・・」

話していると、持田先輩が現れた。その姿は剣道の胴着と片手に竹刀とゆう格好だった。

「待たせたな」

「どうやら決闘の内容は剣道勝負のようですね」

「あぁ。一本を取った方が勝ちとなる。そして勝った方は賞品として、池沢　夏希を手に入れる事が出来る！」

周りからは黄色い歓声（？）が聞こえてきた。
俺はため息をつき、

「まぁ何でも良いですけど、人を賞品扱いするのはどうかと思いますが・・・とくにお嬢様となれば・・・ただじゃおきませんよ」

「うるせえ！とっとと始めるぞ！」

「その前に僕の胴着は？」

そのんなのお構い無しに持田先輩は突っ込んで来た。

「無し・・・か・・・まいっか」

俺は竹刀を握り歩き出した。

「何もしてこないとは、ブァカの極みだな！」

「失礼ながら持田先輩、それはあなたの方ですよ」

すると俺は持田先輩の一撃を必要最低限の動きでかわし、

パアアアアアアアアアアアアアンンンンンン　！！！！！！！！！！！！

一瞬の事だった。
周りの生徒達は何が起こったのか分からずにいた。しかし、山本と佐久間は、

「勝負あったな」

「だな」

すると、持田先輩の面が真っ二つに割れた。

「な！」

「一本・・・取らせていただきました」

「しょ、勝者、高嶺　朱雀！」

すると周りから一気に歓声が沸き起こった。

「ふう・・・終わったか・・・」

俺は竹刀を軽く振り下ろし、剣道場をあとにした・・・。

～・～・～・～・～時間は過ぎて今は夕食の時間。夏希は朱雀の作った料理を食べていた。

「そういえば朱雀」

「何でしょう？」

「剣道場の時思ったんだけど、あなた剣道したことあったの？」

「いいえお嬢様。一度もありません」

「ウソ！じゃあ何であんな動きが出来るの？」

「分かりませんが身体が勝手に・・・」

「へー。じゃあ『お嬢様を物扱いするのはただじゃおきませんよ』は？」
俺はあーと言い、
「失礼ながらお嬢様、我々執事の指名はなんだと思いますか？」
「え？それはこんな風に食事を作ったり掃除をしたり」
「それももちろん大事なことでございます。しかし最も大切なのは主であるお嬢様を守ることでございます」
「え？」
「お嬢様はこれから生涯誰かに支えられて生きていくとゆうことをお忘れ無きように」
夏希はその言葉の後、窓から見える月を眺めた。

え～っと・・・どちら様で・・・？（後書き）

持田先輩・・・、ご愁傷様です・・・。
次回は謎解きします！

殺しのワインはいかがですか？（1）（前書き）

第5話

今回は投稿が空いてしまいました。

そして今回は自己最長のページ数です（」゜□゜）」

皆さん、頑張って読んでください・・・（´∀｀）

殺しのワインはいかがですか？（1）

翌日、俺はクラスで話題になっていた。
そりゃそうだ。市大会の優勝者を一撃でしとめたんだもん。

「ねぇねぇ、朱雀君って剣道やってたの？」

「私も教えてほしいなぁ」

こんな感じでずっと質問攻めにあっている。そんなところに、

「相変わらず人気だな」

「山本。俺の顔が嬉しいように見えるか？」

「いや、どっちかっつーと、疲れてるように見える」

「あたりめーだ！ここまで質問攻めにあって平気な奴を俺は見て見てーよ！」

「いるぜ、一人」

「佐久間だろ」

俺は分かっていた。佐久間はクラスの中でも人気者だ。

「アイツはすげーよ。勉強もスポーツも何もかもが出来る」

「ついでにピアノ、料理もお手のものだ」

「まぁ、唯一苦手なのは、女子だけどな」

そんな感じで話していると、先生が入ってきた。ちなみに一時間目は数学だ。

「ほーら席に着けー。つっても今日は自習なんだけどな」

クラスからは喜びの声があがった。確かに、自習っても先生から課題を出されたのは一度もないからな。

「それじゃあ、席に戻るわ」

「あぁ」

そして、一日が始まった・・・。

～・～・～・～・～・～授業が終わり、今は帰り道。お嬢様と一緒に帰っていると、

「きゃあああああああああああ！！！！！！！！！！」

隣の屋敷から悲鳴が聞こえた。

「なんだ！」

俺はすぐに悲鳴の聞こえた屋敷の二階に向かった。

「どうしました！何があったんですか？」

「あっ・・・ああ・・・」

その女性は目の前を指差した。そこには、

「な！・・・」

一人の男が椅子に座って死んでいた。机の上にはワインのボトルと小さな小瓶、そして床にはワインがこぼれたグラスがあった。

「早く警察と救急車を！」

「は、はい！」

お嬢様がそう叫ぶと女性はすぐに警察を呼んだ。

「朱雀、あなたはすぐに帰りなさい！」

「お嬢様？」

「私がお嬢様ってばれちゃいけない理由があるの！早く！」

「か、かしこまりました」

俺はすぐに屋敷から出た。それから１０分後、すぐに警察が到着した。

～・～・～・～・～「しかし驚きました。お嬢様が刑事だったなんて」

「まあね・・・ってあなた何で知ってるの！」

おっと、口を滑らせてしまった。今度から気をつけないと。

「実を言うと今日、お嬢様を見守らせていただきました」
「そんなことしたら見つかるわよ！」
「申し訳ありません。今度から気をつけます」
夏希はため息をついた。
「はぁー。やっぱり自殺なのかなー」
「と、言いますと」
「あなたも見たかもしれないけど、あの小さな小瓶は青酸カリだったわ。おそらく自殺するために使ったのかもね。朱雀、あなた何かわかる？」
俺は少し黙り込んで、
「い、いえ私にはさっぱり・・・」
『そうよね。刑事が一般人に質問してもね・・・』
夏希がそう思っていると、
「しかし、お嬢様は今日何人かから証言を聞いているはずです。その内容を詳しく話していただければ私（わたくし）なりの考えが述べられるはずです」
すると夏希は少し考えた後、
「分かったわ。話してあげる」

「ありがたき幸せ」

～・～・～・～・～まず死亡した男は、若林　辰夫（たつお）６２歳。第一発見者はあの家の家政婦よ。なかなか起きないから部屋に呼びにいったら寝室であの状態だったてわけ。

で、ここで私の上司、風祭警部が、

「見ろ、池沢君。若林　辰夫は寝る前にワインを飲んでいたのだ」

て、誰でもわかるようなことを言ったんだけど、

「あのお嬢様、この風祭警部とゆう人はアホでらっしゃいますか？」

「まぁ、そう考えて良いわ。」

で、その後若林家の人間が集められたんだけど、そこで辰夫の弟、若林　輝男（てるお）は、

「刑事さん、ひょっとして兄は自殺したのではありませんか？」

「いえ、まだ自殺と決まったわけではありません」

で、さらに長男の若林　圭一（けいいち）は、

「自殺じゃないというのなら、刑事さんはこれは殺人だというんですか」

「べつに殺人であるとはいっておりません。まだ殺人の可能性も否定できないといっているだけでして」

そして今度は圭一の妻である春絵が、

「まあ、刑事さん、なんて物騒なことをいうんです。この家にお義父を憎むものなど一人もいません」
次に次男の若林　修二は続けて、
「刑事さん、親父が死んだのは自殺だよ。みんな知っていることだ。そうだろ」
「と、いいますと」
「昨日、家族会議で親父は家政婦である藤代　雅美（まさみ）との再婚を考えていたのです」
「それで、皆さんの反応は」
「もちろん、反対ですよ。父は騙されているんです、あの女に。きっと財産目当てに違いありません」
すると輝男は胸ポケットからマッチを取り出し、パイプに火を付けた。
「それで結婚を反対された辰夫さんの様子は」
「そりゃあ、すごい落胆した顔で部屋を出て行きましたよ」
「しかし、僕らは父の為に善かれと思って言ったんですから」
今度は圭一が煙草を一本くわえて、百円ライターで火を点けようとしたんだけど、どうやらガス欠みたいで、壁際にいた修二に、

「おい、お前ジッポー持ってたよな。貸してくれ」

やれやれと修二は言いながらと、ポケットからジッポーのオイルライターを取り出し、圭一の煙草に火を点けてやると、ついでに自分の煙草にも火を点けた。

「どうやら若林家は喫煙率が高い家族のようですね」

「えぇ。私もたまらず窓を全開にしたわ」

そして次の瞬間、扉から家政婦の藤代　雅美が入ってきて、

「旦那様は自殺などではありません！旦那様は何者かに殺されたのです！」

すると春絵は、

「あなた！でしゃばるのも、いい加減にしなさい！お義父様は自殺なさったのよ。それもあなたのせいでね！」

すると春絵は続けて、

「えぇ。判ったわ。あなたはお義父様の遺産狙いでこの家に来て遺産をかすめ取ろうとしているのでしょう！」

「いえ！私はそんな・・・」

「黙りなさい！この恩知らずの雌豚め！」

すると、風祭警部は時計を見て、

「おっと、もうこんな時間だ」

時計を見ると、時刻は１時４５分、昼ドラはおしまいだと言いたいのだろう。もう少し見たかったが仕方がない。

「で、朱雀。あなたこの時どこにいたの？」

「はい。辰夫氏の部屋の棚においてあった見事な蔵書（ぞうしょ）に目を奪われておりました」

「ちょっと！ちゃんと仕事しなさい！」

「なんと、私が愛読してやまない『ハ〇ーポッ〇ー』の最新版があったのでございます」

「無視すんな！てゆうか人んちのものを勝手に取ってくるな！」

「もちろん返しますとも。読み終えたらですがってあっ！」

朱雀の手から本が取り上げられ、

「今すぐ返す！」

「・・・はい」

その後も捜査が続いた。で、場所は変わり辰夫さんが一昨日行ったスナックに聞きに行ったんだけど、

「えぇ。来ましたよ」
「どんな様子でした？」
「うーん・・・なんか陽気な感じだったわ」
「はあ・・・」
「あっ！でもカラオケで十八番を歌おうとしたら急に泣き出して」
「急に・・・ですか・・・」
その後、私達はスナックの手伝いをしたの。
「あのー何を作ってるんですか？」
「ん？あぁ。最近、経費削減の為にからしをチューブから練りからしに変えたのよ。でも大変なのよね～」
「は、はぁ・・・」
その後、向かいに住んでいる少年の話によると、
「君が雄太君だね。話があると聞いてきたんだけど」
「うん。あのね、おじいちゃん先生の部屋から明かりが見えたんだ」
「それは何時くらいのことかな？」
「真夜中だよ。午前2時ごろ」
少年は指を2本立てて答えた。

「雷の音で目が覚めてトイレに行こうとしたらおじいちゃん先生の部屋から小さな明かりがゆらゆらーって動いてたんだ」
「少年よそればどんな明かりだった？マッチか？蝋燭(ろうそく)か？」
「そこまでは見えなかったよ」

まあ、この少年の証言は事件にあまり役立たなかったわ。

～・～・～・～・～「どう？朱雀。やはり若林　辰夫は自殺ってことで問題ないでしょ」

しかし、俺は険しい顔をしていた。

「いいえ・・・・・・。それは大問題でございます。お嬢様」

「え？」

「お嬢様、これは殺人でございます」

「え！」

「失礼ながらお嬢様、お嬢様はどのあたりに毒があったと思いましたか？」

「えっと・・・。グラスに塗られていたとかは」
俺は首を横に振り、

「いいえ、こちらをご覧ください。これは磨いたグラスでございます。このとき指でふれた場合」
そして触れてみると、指紋がくっきりとついた。

「あ！」

「このように、何らかのものが触れたときに必ず何らかの痕跡は残るはずなのです。しかし、それがなかった。つまり、考えられる事は１つ。ボトルの中に毒を入れたのでございます」

「どうゆうこと？」

「こちらをご覧ください」

俺は黒野に１本のワインボトルを取り出させた。

「これは？」

「イ〇ーヨー〇ドーの１９９５円ものでございます」

「ホントだ。値札が貼ってある」

夏希はボトルをジーッと見た。

「ねぇ、朱雀。これ、どっから見ても毒を入れるところなんてどこにも無いわよ」

俺は「あー・・・」と言い、その後黒野と顔を見合わせ、

「あの・・・失礼ながらお嬢様」

俺は顔をズイッと近づけると、

「お嬢様の目は節穴でございますか？」

・・・・・・ハァ？
夏希の持っていたコップに亀裂が入った。
「あの・・・お怒りのようでしたらお詫びを・・・」
「謝ってすむならこんな態度しないわよ！」
夏希は朱雀と黒野に怒鳴りつけた。
「それじゃあ聞くけど、あなたこの事件の真相がわかると言うの？」
「いきなり話が変わりましたね・・・。まぁ、この事件はそれほど難しいものではございませんが、しかし・・・」
「何よ」
「今ここで犯人を言ってもお嬢様にはご理解いただけないかと・・・」
「こんの・・・！」
夏希は一瞬、拳を振り上げそうになったが必死にその手を降ろし、
「朱雀、私にも分かるように説明して」
その顔はいかにも屈辱に溢れていた。
「・・・かしこまりました。お嬢様」
すると料理を出しながら、

「しかし、まだ夕食の続きでございます」

目の前に料理を出すと、

「謎解きはディナーの後にいたしましょう」

殺しのワインはいかがですか？（1）（後書き）

最後まで読んでくれた方お疲れ様でした。

次も頑張りますｏ（＾－＾）ｏ

殺しのワインはいかがですか？（2）（前書き）

第６話
今回グダグダです。

殺しのワインはいかがですか？（2）

夕食は終わり俺、黒野、お嬢様は大広間にいた。
「では話の続きをいたします。まず、犯人はどうやってワインボトルのラベルをはがさずに青酸カリを入れたのか。それは簡単でございます」
俺はもう一度ボトルの口を見せた。
「よーくご覧ください。ここに小さな穴が二つ空いているのが見えますでしょうか？」
「え！」
夏希はもう一度ボトルの口を見た。確かにラベルの頭に小さな穴が二つ空いているのが見える。
「これは？」
「恐らくワインの熟成を促すための空気穴でございましょう。ワインボトルを見慣れていないお嬢様が分からないのも無理はありません」
「ふん！どうせ私の目は節穴ですよ！」
どうやら夏希はまだあの言葉を引きずっているらしい。
「で、その穴から注射針かなんかで毒を入れたってことね」

「さすがはお嬢様、ご理解がお早い。おそらく、辰夫氏が外出している間に部屋へ侵入し、毒入りワインボトルとメッセージカードらしきものを置いていったのでございます」

「メッセージカード？」

「これに関しては後ほど説明させていただきます」

そして俺は続けて、

「まず、お嬢様は辰夫氏が自殺したとお考えのご様子。しかし私はそうは思いません」

「どうして？だって辰夫さんは涙を流すほど思い悩んでいたのよ」

「それは勘違いでございます。スナックのママはからしを練りからしに変えたと言っていました。そこに涙の原因があったのです」

「え？」

俺は二つの皿を持ってきた。

「こちらに市販のチューブのからしと練りからしをご様子しました。ご賞味ください」

夏希はまず、チューブのからしをスプーンに取り食べ、苦い顔をしながらも練りからしを食べた。すると、

「！こっち辛っ！」

「はい。練りたてのからしは涙がちょちょぎれるほど辛いものなのでございます」

「先に言ってよ」

夏希は涙目で言った。

「つまり、辰夫氏の涙の原因は精神的苦痛ではなく、人間の反射運動によるものだと思われます」

「なるほどね～」

「そして次に注目すべき点は雄太少年の証言にあります。少年は辰夫氏の部屋から小さな明かりが見えたと言っていました」

「でもあの証言はあまり役立たないわ」

「いいえ、お嬢様。これは重要な証言でございます。まず、私が辰夫氏の部屋にいたとき入り口の脇の棚に懐中電灯が置いてありました。なのになぜ、火を灯したのでしょう？」

「えっと・・・。停電だったから？」

「確かにそれもございます。しかし、若林家の人間はあそこに懐中電灯があったことを誰もが知っているはずです。つまり、部屋にいたのは懐中電灯が無くても困らなかった人物に絞られます」

「そっか。それじゃあ、犯人は手元にライターやマッチを持っていたあの喫煙者達に絞られる」

「作用でございます。しかし、マッチの明かりでは作業には不十分でございます。作業中、何本もマッチを擦らなくてはなりません」

「てことはマッチを使っていた輝男は犯人ではないわね」

「はい。さらに圭一の妻、春絵も犯人ではございません」

「どうして？」

「彼女は喫煙者ではないからです。あの時圭一はライターのガスが切れたとき、隣に座っていた春絵ではなく、修二から借りた。すなわち、春絵は火を点ける物がなかったとゆうことになります。そしてさらに普通の１００円ライターではボタンをずっと押し続けなければ火は消えてしまいます」

「てことは、圭一も除外されて、犯人は修二ってことね！」

お嬢様は自信ありげに話したが俺は、

「まぁ、半分当たっていて、半分間違っているといって良いでしょう」

「え？どうゆうこと？」

「ここで先ほど話したメッセージカードについて話しましょう。恐らく犯人は辰夫氏に毒入りワインを確実に飲ませるためにメッセージカードを使ったと思われます」

「え？」

「お嬢様、昨日はどのような天気だったかご存じでしたか？」

「えっと・・・確か雷と雨が降っていたわ。でもそれが何か？」

「雄太少年の証言によると、辰夫氏はいつも窓を開けていました。

そして、藤代　雅美さんの証言によると寝る前に本を読んでいたと言っていました。しかし、あの時机の上には本など一冊もありませんでした」

「確かに無かったわ」

「そして、私は本棚を見て、一つ疑問に思ったことがありました」

「疑問に思ったこと？」

夏希は首をかしげた。

「はい。それは一冊だけ逆さまだったことです。１０冊や１５冊ならまだしも、一冊だけ逆さまなのは少し違和感がございます」

「確かに。でもどうして？」

「犯人が暗闇のなか作業していてうっかり間違えたのでございましょう。恐らくその中に・・・」

「メッセージカードがあるってわけね。でも一つ分からないのは動機よ」

「遺産争いでございましょう。恐らく辰夫氏は藤代　雅美さんとの結婚を押し切るつもりだった。このままでは遺産が減ると考えた犯人は辰夫氏を殺害した」

「お金のために大切な家族を殺す？私には想像もつかないわ」

俺は眉間にシワを寄せた。

「お嬢様にはご理解出来ないかもしれません。しかし、人は数千万・・・いえ、わずか数百、数十万でも殺意を抱くものなのでございま

す。お嬢様は生涯お金に苦労する事はないかもしれません。しかし・・・」

俺はお嬢様の目を見て、

「お金というものはそれほど恐ろしい物なのだと言うことをお忘れ無きように」

夏希はしばらく黙っていた。そして、

「若林家に行くわよ朱雀」

俺は口元に笑みを浮かべ、

「かしこまりました。お嬢様」

〜・〜・〜・〜・〜ピンポーン・・・。

「はい」

扉からは藤代　雅美が出てきた。

「お邪魔するわよ」

「え？」

「失礼します」

「え？ え？」

俺とお嬢様は真っ直ぐ辰夫氏の部屋に向かった。

「ちょっと、何なんですかあなたたち！」
若林家の人達も集まってきた。
俺は本棚にある逆さまの本を見つけ出した。
『これだ』
その本ねページをパラパラとめくっていくと、封筒のような物が挟まっていた。そこには藤代　雅美以外の家族のメッセージが書かれたメッセージカードだった。
「ここに書かれたことはどれも本心ではございません」
「どうゆうこと？」
「家族全員が共犯者とゆうことです。家族で相談し、辰夫氏を殺害したのでしょう」
「どうして・・・どうしてですか！」
雅美さんは叫んだ。
「うるさい！お前が俺達の金を・・・」
「いいえ、それは違います。辰夫氏は藤代　雅美さんを新たな家族として加えたかっただけでございます」
「なに？」
「あちらでございます」

俺はワインが並んでいる棚を指差した。

「あのワインは圭一さん、輝男さん、修二さん、春絵さんの生まれた年のワインでございます。そして、この鍵の番号は１０９。亡くなった奥様の誕生日でございます」

そのとき家族の全員がハッとした。

「やはり辰夫氏は亡くなった奥様のことを忘れずに覚えていたのでございます。彼はこの中に雅美さんという新たな家族を入れたかった。ただ、それだけだったのです」

その後、警察が来て四人を連れていった。

「分かってたの？家族が共犯者だって」

「はい。家族の証言は辰夫氏は落胆した顔で出て行ったと言っていました。しかし、スナックのママは辰夫氏は陽気だったと言っていました。つまり、家族全員が口裏をあわせていたということ。本当は結婚に賛成していたのでしょう」

夏希は複雑な顔をしながら、

「そんな矢先に家族によって殺される。辰夫さんどんな気分だったか」

俺達は黙りながら寮に戻っていった・・・。

殺しのワインはいかがですか？（2）（後書き）

今回はあまり良い出来ではありませんでした。
次回頑張りますｏ（＾－＾）ｏ

体育祭の醍醐味って騎馬戦なのかな？（前書き）

第7話
今回は短めにしました。

体育祭の醍醐味って騎馬戦なのかな？

5月

春が少し終わりに近ずき、桜が葉桜に変わる頃。教室ではあることが話し合われていた。

「そんじゃあ、玉入れの選手が決まって次は騎馬戦の大将なんだが・・・。誰がやる？」

そう、話し合われていたのは二週間後に開催される体育祭のことだ。俺は綱引き、棒倒し、リレーにでることになっている。そして今は、体育祭の目玉である騎馬戦の話し合いをしていて、誰が大将をやるのかを話し合っている。

「で、事前に候補のアンケートをやったんだが、候補になったのは朱雀、お前だ」

「え！俺！なんで！」

「そりゃあ、この前の持田先輩との対決を見れば・・・なぁ」

なぁじゃねえよ！なぁじゃ！

「普通の騎馬戦ならまだしも去年の体育祭の騎馬戦。ビデオで見たけど、ありゃあ戦争だぞ！戦争！」

「え？それが騎馬戦じゃないのか？」

おい実行委員。あんたビデオ見てたのか？あんた見てないからそん

なセリフをサラッと言えるんだよ！

「で、どうするんだ？」

うっ・・・。みんなの目がこの上ないほど輝いている。「いけ！朱雀！」とか、「お前はヒーローだ！」とか、「もっと熱くなれよ！」とかいう気持ちが痛いほど伝わってくる。

『ここは・・・やるしかないのか？どうする・・・どうするア〇フル』

そして迷った末、

「・・・分かったよ。やってやる」

その瞬間、クラス全員の歓声が湧いた。

「あー。喜んでいるところ悪いんだが、俺の騎馬は誰がやるんだ？」

その瞬間全員が石ように固まった。

てか、それ頭に入れてなかったの？みんな？

そんな中一人が手を挙げた。

「んじゃあ俺がやるよ」

「！山本！」

「こんくらいはやんねーとな。で、後は誰がやる？」

そしてそれから１０分後、ようやく騎馬が決まった。

「よし！体育祭まであと二週間。張り切ってこーぜ！」

～・～・～・～・～そしてその夜・・・。

「そういえばお嬢様は体育祭には出ないのですか？」

「出るけど、それがどうしたの？」

「いえ、私とお嬢様は別のクラス。出るとなれば戦う種目があるかもしれませんね」

「そっか。で、朱雀。あなたは何に出るの？」

「話したい気持ちはありますが、ここは手の内を明かさない方が良いと思いますのであえて言わないでおきます」

「そう。それじゃあ二週間後が楽しみね～」

「そうですね」

～・～・～・～・～そして二週間後・・・。いよいよこの日が来た。俺達は円陣を組んでいた。

「そんじゃ朱雀。かけ声頼む」

「え！俺！」

「あたりめーじゃん！お前、大将なんだから」

「そっか。んじゃあ」

俺は一息入れて、

「さて、いよいよこれから体育祭に乗り込むわけだが、これだけは忘れんな。・・・何が起ころうと、楽しんでこーぜ！」

俺は大きく息を吸って、

「いくぞ！」

「「「「「オオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！」」」」」

そして運命の体育祭が始まった・・・。

体育祭の醍醐味って騎馬戦なのかな？（後書き）

戦争みたいな騎馬戦ってどんな感じでしょうねＷＷＷ．
想像しただけで恐ろしい。

捕らわれた親友（前書き）

第８話

またまた長くなって、最多ページ数を更新しました（・―・；）

捕らわれた親友

体育祭も始まり、今は種目も終わり次の種目の準備をしている。

「まず、一つ目は快勝だな」

「あぁ。結構楽に勝てたな」

ちなみに第一種目は玉入れで山本の活躍により快勝した。

「それにしても山本には救わせたよ」

「何言ってんだよ。お前だってバンバン入れてたじゃないか」

「お前程じゃねーよ。だがしかし、佐久間のクラスとE組はヤバかったな」

「あぁ。ありゃあ強敵だ」

E組というのはあまり詳しいことは知らないが、スポーツ推薦で入ってきた奴が偶然固まったクラスである。

しかもそのクラスにもAランクオーバーの守護者がいるらしい。

「なぁ山本」

「E組のAランクオーバーの奴のことだろ」

ったく。こいつは読心術でも取得してんのか？

「あぁ。知ってんのか？」

「いや。名前くらいしか聞いてない」

「名前は？」

「上茂　涼介（かみしげりょうすけ）属性は分からないけどな」

「そうか・・・」

すると、アナウンスの声が聞こえた。

『それでは次の種目、１００メートル走に出場する選手は準備してください』

「おっ！確かこの種目は佐久間が出るんだっけ？」

「まぁ結果は分かってるけどな」

そこで入場門に行ってみると、やはり佐久間がいた。

「おーい佐久間ー」

「なんだお前か」

「なんだって何だよ。応援しに来たのに～」

「いらねーよ。んなもの」

「そー言うなって。頑張れよ」「あぁ。一位になってくる」

そう言いながら佐久間は会場に向かった。

「・・・・・・」

「どうした？朱雀」

「ん？あぁ、ちょっと懐かしいなって。中学のころが」

「中学のころ？」

「あぁ。アイツのことこんな感じで見送ったな～って」

「へー。お前、友人いたんだ」

「悪かったないないように見えて」

「ハハッ。わりーわりー冗談だって」

「ったく・・・」

俺は空を仰ぎながらあの日を懐かしんでいた・・・。

～・～・～・～・～「おーい。孝平ー」

「ん？」

そこで振り向いたのは男子生徒。如月（きさらぎ）　孝平（こうへい）は朱雀を見つけ、

「おー朱雀。お前もこの種目に出んのか？」

「いや、俺は出ねーからお前の応援」
「そーか。つっても応援はいらねーよ」
「んなこと言うなって。とゆうわけで頑張れよ」
朱雀は手を前に出した。
「あぁ。一位になって帰ってくるよ」
『それでは入場してください』
孝平は朱雀とハイタッチを交わし、入場していった・・・。
～・～・～・～・～時は過ぎ、今は昼休み。みんなそれぞれ弁当を食べている。
ちなみに俺は山本、佐久間と一緒に食っている。さすがにお嬢様と食べるのは周りからの目を感じるので事前に弁当を作っておいて渡しておいた。
「え～と、今トップのクラスは・・・E組か」
「つってもほとんど差は無いけどな」
「まだ逆転可能の範囲だ」
「次なんだっけ？」
俺はパンフレットに目を通した。
「次は・・・フォークダンスだな」

「フォークダンス！？これまた面倒なヤツが来たな」
「まぁまぁ、そう言わずにやればすむ話だ」
佐久間はため息をつきながら会場に行った。
「さて、俺達も行くか」
「そうだな」
俺は重い腰を上げた。すると携帯が鳴った。
「あぁ、悪い山本。先に行っててくれ」
「オッケー」
俺は携帯を耳に当てた。
「もしもし」
「高峰　朱雀か？」
その声は明らかに人の声ではなかった。変声機で声を変えているとしか思えない。
「誰だお前」
「フフフ・・・。私はＩＴ。クロケッサファミリーの者だ」
「いったい何の用だ？」
「お前のリングをいただきたい」

「ボンゴレリングのことか」

「作用」

「・・・断る」

「ならば仕方がない。無理矢理でも奪いに行くとしよう」

「何？」

すると一人の男子生徒が叫んだ。

「なっ！なんだあれ！」

振り向いた視線の先には、何かこっちに向かってくる物体が見えた。それは車でもバイクでもないものだった。

「あれは・・・ジェット機！？」

そのジェット機から降りてきたのは三人の女達だった。恐らく真ん中にいるのがＩＴで両端の女どもが部下だろう。

「お前がＩＴか」

「そうだ。そしてコイツらが私の仲間、ＥＱとＮＷだ」

これは本名ではなくコードネームだな・・・。

これじゃあどこの誰だか・・・。

「もう一度言う。ボンゴレリングをいただきに来た。さぁ、リングを渡せ！」

すると、観衆の中から、
「何がなんだか知らねーけど」
「このリングは渡すわけにはいかねーなぁ」
「山本！佐久間！」
「ほぅ。他にもリング所持者がいたか」
「とゆうわけで、派手な登場の後すまないが帰ってくんねーか」
「体育祭の続きがあるからな」
するとＩＴは、
「そうか・・・。お前コイツがどうなってもいいようだな」
「どうゆう意味だ？」
「これを見ろ」
ＩＴは校舎にあるものを映し出した。
『！コ・・・コイツは・・・』
「孝平！」
「そう、貴様の友人如月　孝平だ。コイツには時限爆弾をセットしてある。あと３０分もすればドカンさ」

「そんな・・・」

「コイツを救いたければ、リングを渡せ！」

「くっ・・・卑怯な・・・」

そのとき、俺は迷っていた。

『クソッ！どうする・・・渡さなければ孝平は・・・だが渡したとしても殺す可能性が・・・』

すると、モニターから、

「す・・・ざく・・・」

！！！

その声の主は孝平だった。

「孝平！」

「チッ、起きちまったか」

「ダメ・・・だ・・・絶対に・・・その・・・リングを・・・渡しては・・・ならない」

「だがそれではお前が！」

「朱雀・・・お前が・・・ファミリーを・・・・・・守れ・・・その・・・ボンゴレ・・・リングで・・・」

「孝平・・・」

「俺の・・・ことは・・・気にすんな・・・そのリングさえ・・・守れれば・・・それでいい」

「ふん。忌々（いまいま）しい。親友を殺してほしくなければリングを渡せ！」

俺は少し黙った後、

「・・・山本、佐久間。頼みがある」

「何だ？」

「孝平を探し出して時限爆弾を止めてくれ」

「朱雀・・・やめろ・・・」

「悪い孝平・・・お前の言うこと・・・聞けねーわ。だってよ、目の前で親友が殺されるの黙って見過ごすわけにはいかねーんだ。もし、そんな事したら・・・俺は一生後悔する。だから俺は・・・」

俺はＩＴを指差し、

「コイツをブッ倒して、お前を救い出す！！！」

山本は笑みを浮かべ、

「まっ、お前らしいな」

「まったくだ」

二人は納得したように言った。

「頼んだぞ二人とも」

「あぁ」

「りょーかい」

二人は校門へと去っていった。
それを見送った俺は、

「んじゃあ先生みんなを校庭から避難させてください」

「わ・・・分かった」

先生も動き出し、生徒を校舎に避難させ、一部が雷の炎で結界を張った。

「朱雀君。本当に大丈夫なんだな」

「大丈夫ですよ。綱吉さん。もしもの時だけお願いします」

「・・・分かった。だが、もしもの時は加勢するからな」

そういって綱吉さんは戻ろうとした、

「あっそうだ懐中時計、上手く使えよ」

そういって戻っていった。

「何を話したか知らないが、どんなにあがいても私達には勝てない

ぞ」

「そんなの闘ってみなきゃわかんねーぜ」

「朱雀・・・どうして・・・ここまで・・・」

「孝平・・・一つ言わせてくれ。俺は親友の為ならなんだっできると思ってた。けど、こんな頼みを聞くくらいなら、俺はお前となんか友達になってねーよ。だから・・・俺は絶対、お前を救ってみせる！そのためにも俺はコイツに勝ちたいんだ」

すると、俺のポケットから光を放った。

「こ・・・これは！あの時貰った懐中時計！」

「ぐっ・・・なんだ！？」

結界の内側で綱吉は笑みを浮かべていた。

「そう、それがお前の武器だ。ここからどうするかはお前の答え次第だ」

するとその光はさらに強くなり、

『くっ・・・ダメだ。目を開けられな・・・』

～・～・～・～・～目を開けるとそこは青空が広がっていた。

「ここ・・・は・・・」

「待っていたぞ」

！！！

振り返るとそこには歴代のボンゴレボス達がいた。そこにはボンゴレの創設者ボンゴレⅠ世もいた。

「何これ・・・夢？幻覚？」

『E'la nostra ora incisa sull'anello（リングに刻まれし我らの時間）』

「刻まれし・・・時間？」

「お前はこの力を受け継ぐ覚悟はあるか」

「え・・・」

「お前はこの力をどう使いたい」

「どうって・・・それはもちろん・・・」

俺は心の底から思っていること口にした。

「みんなを守るために使いたい。大切な人や仲間、友達を守るために！」

「その仲間のためにすべてを賭けられるか」

「え・・・」

「すべてを投げ出してまで助け出す覚悟が・・・」

俺は少し黙った後、

「・・・はい」

するとⅠ世は、

「良い顔だ。その覚悟しかと受け取った。この力で栄えるも滅びるも好きにせよ、ボンゴレⅩⅠ世（ウンディチェーズィモ）」

！！！

「お前を待っていた・・・さぁ、行け！」

～・～・～・～・～・～その頃校舎内では、

「お、おい何だよあれ・・・」

「わかんねー。朱雀が光に包まれてるとしか・・・」

それを見ながら夏希は心配そうにしていた。

『朱雀・・・』

～・～・～・～・～・～その頃ＩＴ、ＥＱ、ＮＷはまだ警戒している様子だった。しかし、そろそろしびれを切らした様子である。光に向けて銃口を向けよいとした、その時

「？待て」

ＩＴは光の中から微かだが何かが見える。

すると、その中から

「昔、親父にこんな事を言われた。『やりたいことをやれ！そうすればいつか自分のやるべきことと合わさり世界の声が聞こえる』って。今がそうなのかもな」

俺は口元に笑みを浮かべた後、

「さぁ、派手に行こーか！一緒にこの世界を変えよーぜ！」

一気に光は強風ともに弾け、辺りに強い風が吹き荒れた。

「自分の答えを出したか・・・。やはり、アイツの武器は俺達と同じ・・・」

そこには額に炎を灯し手の甲にはボンゴレの紋章を宿したグローブをはめた朱雀がいた。

「グローブ使いだ！」

俺は拳を握り直し、

「さぁ、始めようか！」

捕らわれた親友（後書き）

いやー。迷った末、やっぱしツナとジョットと同じグローブ使いになってしまいました。
今度から色々な工夫を凝らして頑張りますｏ（＾－＾）ｏ

天空鷹（ファルコディチェーリ）（前書き）

第９話

更新が少し遅れました。すみませんｍ（＿＿）ｍ

久しぶりの戦闘描写です！ご覧ください！

天空鷹（ファルコディチェーリ）

「さぁ、始めようか」

俺はアニマルリングに炎を灯した。

「いくぞ。イーザス」

そこに現れたのは、大空の炎をまとった一羽の鷹だった。

『やはり『朱雀』なだけに鳥だったか・・・』

ツナはそう思いながら、結界の中から見ていた。

～・～・～・～・～その頃山本、佐久間は孝平を探していた。

「クソッ！何処にいるんだ！」

「早く見つけねーと時間が・・・」

二人は今、とある工場の中にいた。しかし、まだ孝平を見つけられずにいた。

「おーい！孝平ー！」

「いたら返事をしろー！」

すると奥の方から、

「誰・・・だ・・・」

「あっちだ！」
そこは椅子に鎖で縛られた孝平がいた。お腹には時限爆弾が巻かれている。
「お前らは・・・確か・・・朱雀の・・・・」
「あまりしゃべるな。今助けてやる」
しかし、ここで佐久間が『あるもの』に気づく。
「こ・・・これは！」
「どうした？」
「パスワードだ・・・」
そうそこには一台のノートパソコンがあり、画面には四桁のパスワードがあった。
「残り時間は！」
「あと２０分だ！」
「どこまでいけるか・・・だな」
二人は暗号解読に取りかかった・・・。
～・～・～・～・～「ハァ・・・ハァ・・・」
ＩＴ達との戦闘が始まってすでに１０分が経過していた。
あれから朱雀も山本達が時限爆弾のパスワード解析に手を焼いてい

るのはモニターを通して伝わっていた。

『クソッ・・・４桁のパスワードっても全部数字って言うほどコイツらはバカじゃねえし、どうする・・・』

これほど朱雀が手こずっている理由は奴ら戦い方にあった。
三人なだけあって連携が良く、うかつに突っ込めば確実にやられる。

「それにしても、アイツらの銃はいつ弾切れになるんだ・・・」

そう、普通の銃ならば一丁の弾数は１２～１３発程度、なのにアイツらは１２発おろか、３０は撃っているように見える。見た目は普通の銃なのに・・・。マガジンを入れ替えた仕草も見当たらない。

『クソッ！どうなっていやがる！』

そう思っていると、ＩＴ達は容赦なく撃ってきた。俺は炎でシールドをつくり防御した。
その時あることに気づいた。

「これは・・・」

そこで俺はある一つの仮説が浮かんだ。

『・・・賭けてみるか』
俺はマイクで綱吉さんを呼んだ。

「綱吉さん。一つ頼んでもいいですか？」

「何だ？」

「それは・・・」

俺は内容をすべて話した。

「分かった。やってみよう」

「お願いします」

銃撃が止むと同時に俺は突っ込んだ。ＩＴ達も怯むことなく撃ち続けた。俺は炎のシールドを広げながら接近した。

俺は懐に潜り込んだ。

「クッ！なめるなあああ！！！！」

銃口は俺の額に向けられた。しかし、そこが俺の考えた作戦だった。すでに超死ぬ気モードになり後ろにまわっていた綱吉さんが銃をつかみ、

「零地点突破（ファースト）初代エディション！」

すると、ＩＴ達の持っていた銃が全て氷付けにされた。

「やっぱりな。あの銃弾は全部、死ぬ気の炎で出来てたんだ」

「・・・どこで気づいた？」

「さっきガードしてた時、妙な事に普通の銃弾なら炎シールドによって溶かされて溶けた跡が少しでも残るはずだった。しかし、それがなかった。つまり、死ぬ気の炎をぶっ放していたということになる」

「フンッ・・・なるほどな・・・」
「何故こんな事をした？お前の仲間がもしこんな目に遭ったら黙ってられないだろう？」
「仲間？・・・フフフッ・・・フハハハハハハハハハハ！！！！！！」
「何がおかしい？」
「仲間？笑わせてくれる！コイツ等なんかな私の手駒にすぎないんだよ！」
「なん・・・だと・・・」
「こんな奴らなんか死んだって困らねーんだよ！」
「お前・・・」
「それよりいいのかなぁ？もう時間がないぞ！」
！！！
モニターにはパスワード解析に苦戦している佐久間と山本が映っていた。
「朱雀・・・ダメだ！全く解けねー！」
「あと一分だ！」
すると孝平が、

「二人とも・・・逃げろ・・・。もう・・・間に合わない・・・」

「まだだ！まだあと一分残ってる！」

「そうだ！絶対に救ってやる！お前と朱雀の友情のために！」

「佐久間・・・山本・・・」

しかし、時間は無情にも過ぎていく・・・。

そして・・・遂に・・・、

「3・・・2・・・1・・・」

カチッ・・・。

～・～・～・～・～その時、俺の中で時が止まったように思えた。

頭の中が真っ白になった。

「あれ？・・・爆発・・・しない」

モニターの佐久間の声で俺は我に返った。

校舎内からはどよめきが聞こえた。

「おい・・・どういうことだよあれ」

「まさか・・・」

綱吉さんはモニターを見ながら、

「どうやらあの爆弾は偽物だったみたいだな」

するとＩＴは笑い出した。

「フハハハハハ！！！！！！！いやー楽しかった！久しぶりに生きてるって感じしたわ！見たかよアイツらの慌てた表情！フハハッ！踊らされてやんの！フハハハハハハハ！！！！！！」

「お前・・・！」

綱吉さんは拳を握り前に出ようとした。しかし、俺はそれを止めて、

「ふざけてんじゃねえぞてめぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！」

そこでＩＴの笑いが止まった。

「何が面白れーだよ！何が生きた感じしただよ！ぜんっぜん面白くも何ともねーよ！」

「朱雀・・・」

「お前本当にムカつくよ。この世界では、小学生も中学生も・・・高校生も大学生も社会人もじっちゃんもばっちゃんも・・・みんな死ぬ気で生きてんだよ！」

「朱雀君・・・」

「お前なんかに生きてること実感する資格なんかこれっぽっちもねーんだよ！」

「朱雀・・・」

「どうしてお前の仲間は今までお前についてきたと思う？それはお前が大切だからだろ。お前に忠誠を誓って、お前を信じてついてきたんだろ？」

「アイツ・・・」

「そんな奴らの忠誠心踏みにじって、死んでも困らねーとか言ってお前何なんだよ！ファミリーだろ！お前の“家族”だろ！」

「朱雀・・・」

「お前だけは・・・お前だけは死んでも許さねえ！！！」

すると、グローブが急に輝きだした。

「クッ！・・・何だ！」

「来たか・・・」

「え？・・・」

輝きが止むとそこには形状が変わったグローブがはめられていた。

「これは・・・」

「そう、それこそがお前の真の武器。『ＸＩグローブ』だ！」

「これが・・・俺の真の武器・・・」

俺はグローブに炎を灯した。すると今までに無い力が溢れ出てきた。

『すごい・・・。心の底から力が溢れ出てくる。それに、今までよりしっくりする！』

「さぁ、決めてこい！ボンゴレⅩⅠ世！」

「オオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！！」

俺は速攻で突っ込み、奴の懐にもう一度潜り込んだ。

ＩＴも抵抗しようとしたが、時すでに遅し。俺は拳を握り締め思い切り腹に一撃を入れた。

奴の身体はくの字に曲がりそのまま吹っ飛んでいった。飛んでいった先では既に戦闘不能になったＩＴの姿があった。

「勝った・・・」

「勝った・・・」

「かっ・・・た・・・」

「「「「わああああああああああああああああ！！！！！！！！！」」」」

校舎内から割れんばかりの歓声が巻き起こった。

俺は空を仰いで、

「終わっ・・・た・・・」

バタッ・・・。

「おい朱雀君！」

「「朱雀！」」

俺はその場に倒れ込んだ・・・。

その後の事は俺は覚えていない。

しかし、孝平も山本達も無事で、俺は死んだように病院のベッドで寝ていたそうだった・・・。

天空鷹（ファルコディチェーリ）（後書き）

戦闘中に武器のバージョンアップ・・・。なんかすごい事しちゃいました・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3742y/

謎解きはリボーンの後で・・・

2011年12月10日01時05分発行